

## 「英語を使える」環境整備～ 英語合宿実施報告<sup>1)</sup>

平岡 禎一\* 森 和憲\* 鳥越秀知\* 畑 伸興\*

### Creating Environments for “English in Use” --- A Report on the English Camp

Teiichi HIRAOKA, Kazunori MORI, Hidetomo TORIGOE, and Nobuoki HATA

#### Synopsis

This paper reports on the English camp which was held as one of the projects for activating various activities of students at the College. One of the difficulties for Japanese learners of English is the lack of everyday environments where the learners are exposed to spoken or written English. This lack of “English environments” leads to another lack of opportunities for them to get themselves engaged in interactive use of English for some communicative purposes. In other words, creating such environments for the learners can be one of the most effective factors to promote learning and enhance motivation. The results of the questionnaire after the camp show that the participants have had highly positive attitudes towards joining the camp and engaging themselves in some communicative games or activities.

#### 1. 目的

国専協(2002)は高校生と高専生の学力についてかなり大規模な調査をおこない、全般的に高専生の学力が劣っていることを報告した。そして、国専協(2003)では、この状況を変えるためにどのような改革が必要かについて、「コミュニケーション能力育成を主眼とした高専英語教育のありかた」と題した 26 項目にわたる「提言」をまとめた。その中に「国際交流・海外研修・留学の積極的推進」と題した以下の提言がある(p. 27):

高専卒業生に求められる資質として、専門的知識・技能と共に国際コミュニケーション能力が挙げられる。海外留学は、学生の語学学習へのモチベーションの高揚に加えて、実質的な語学力の育成にも効果がある。海外留学の単位化・奨学生制度等の整備や支援を

積極的に教育プログラムに取り込みたい。

この提言を待つまでもなく、高専生に限らず、日本で英語を学習する日本人英語学習者にとって、英語学習を困難にする要因の一つが英語環境の欠如であることは明らかであろう。これは入力・出力、両面について言える。一般的なテレビ、ラジオ、新聞などのマスメディアは全て日本語である。例外的な地域・地区を除き、ほとんど全ての教育機関において授業は日本語でおこなわれ、ほとんど全ての日常会話は日本語でおこなわれている。大部分の日本人にとって、英語は生活感のない言語であり、それは高専生にとっても同じである。

ではどうしたら良いのか。先の提言のように、海外留学が手軽に実現できればそれに超したことはない。だが、現実的には、大部分の高専生にとっては容易なことではない。

このような状況の下「英語はコミュニケーションのための手段であり、生活するための道具の一つである」ことを学習者に認識させるためには、そのような「場」を学習環境内に創ることより他

\*一般教科

に手段はない。あくまでもそれは「非日常」の場に過ぎないが、日常生活の中で英語がほとんど使われていない環境においては、やむを得ない。

この「場」は教室でも良いし、教室以外でも良い。教室の場合、時間、空間、そして内容にかなりの物理的・心理的な「無理」がある。「コミュニケーションの道具としての英語」を実感させることが全く不可能ではないが、往々にして、お決まりの場面設定での「儀礼的」な会話練習に終止しがちである。そのような活動に終止する「場」が「英語の日常」となってしまい、「所詮英語は授業中だけのもの」という意識・態度が学習者の中に形成されている可能性も高い。

一方、海外でのホームステイや、今回取り組んだ合宿研究など、教室の外に「場」を求めた場合、物理的制約だけでなく、学習者の心理的制約もかなり取り払われる（もちろん、新たな種類の心理的負担が増えることもある）。そこでは儀礼的な会話や状況ではなく、現実的で実際的な目的のために英語が使われることを実感（体感）できる。

本論は、コミュニケーションの道具としての英語を体験することを第一目的とし、学生同士、および学生と教員の交流を深めることを二次的な目的として実施した合宿研修についての報告である。

## 2. 方法

### 2.1 主な日程

研修方法などについては英語科で協議し、以下の内容を学生へ周知した：

- (1) 日時：平成 17 年 2 月 5 日(土)  
～2 月 6 日(日)
- (2) 場所：香川県立五色台少年自然の家
- (3) 参加費 1470 円（食事代）
- (4) 募集人数 24 名
- (5) 日程
  - 2 月 5 日（土）
  - 10：00 学校発（バス）
  - 11：00 研修所着
  - 11：30 オリエンテーション
  - 12：00 昼食
  - 13：00 オリエンタリング
  - 15：00 研修（1）
  - 16：30 研修（2）

18：00 夕食，入浴

20：00 研修（3）

21：00 自由研修

23：00 就寝

2 月 6 日（日）

6：30 起床

7：30 朝食

9：00 研修（4）

11：00 研修所発（バス）

12：00 学校着，解散

### (6) 携行品

- ・オリエンタリングができる服装，靴帽子
- ・天体観測（屋外）ができる衣服（かなり寒いので厚着をすること）
- ・寝間着，洗面道具，入浴道具
- ・現金（自動販売機あり）
- ・保険証の写し，必要な薬
- ・筆記用具，辞書，ノート

### (7) 持込禁止品

- ・アルコール，タバコ，ガム

### (8) 宿題

- ・自己紹介文(2 分程度)を書く自分の名前，住んでいるところ，趣味，好きなこと，今はまっていること，家族の紹介などなど何でもよい，
  - ・『シュレック』を観る
- （図書館にDVDが納入予定）

### (9) その他

メールアドレスを kmori@dg.takuma-ct.ac.jp まで送信，その際，必ず名前をメール本文に記入しておくこと

参加申込は合宿実施の 20 日程度前を申込締切りとした。当初はバスの乗車人数，および外国人講師の数（3 名）などから，募集人数は 24 名としたが，最終的には 27 名の参加があったため，全員を参加させることとした。

### 2.2 外国人講師

外国人講師については，1 人当たり 8 人程度の指導を念頭に置き，3 名に依頼した。

### 2.3 事前研修，班編成

研修の約 1 週間前に事前研修をおこない，目的，日程，宿題などの説明の他に，班編成をおこなっ

た．参加者 27 名を，生活班，オリエンテーリング班，および授業班といった 3 種類の班編成で分けた．生活班は食事の配膳や寄宿舎の清掃等の役割を分担させるためのもので，これは男女別に 1 つずつ班を構成した．オリエンテーリング班は，オリエンテーリングを行うための班で，講師 5 名が引率する関係上，5 班に分け，学生数は 1 班につき 5～6 名となった．授業班は，研修を受けるための班編成で，外国人講師 1 人につき学生 9 名となるように，3 つの班が構成された．

オリエンテーリング班と授業班の編成に関しては，学年や男女比に配慮し，かつ，友人が同じ班に入るように，事前にある程度の希望を調査し，それを班編成に反映させた．

### 3. 内容

#### 3.1 オリエンテーリング：ウォークラリー

当英語合宿の研修を本格的に始める前に，参加者同士がお互いをよく知ることで，彼らの結束を強め，以後の合宿活動を円滑に進めることをねらいとして，ウォークラリーを企画した．ウォークラリーとは，あらかじめ決められたルートを，チェックポイントを通過しながら走破する競技である．ここで重要なことは，私たちの合宿の目的は英語を使うことである．したがって，ウォークラリー中の会話はすべて英語で行うように徹底した．

英語の会話のみという状況はおろか，ウォークラリーも初体験の学生が多かったため，はじめは戸惑う学生もいた．与えられる指示も英語であれば，学生同士の会話も英語でしなければいけない状況では，無口になる学生が多かった．しかし，ずっと無口で歩くことが苦痛に感じてきたのか，次第に学生は何かをしゃべるようになった．ただし，多くのものは日本語まじりの英語で会話していた．合宿中のルールでは日本語を使用することには，10 円の募金をするようになっていたが，ここでは合宿研修の導入部であることもあり，あえて日本語使用を厳しく禁止することなく，看過した．しかし，日本語のみを使用する学生には，英語のみを使用するよう注意した．結果として，はじめは日本語の割合が多かった学生も次第に英語を使うようになり，片言ではあるが，英語でやり取りするようになった．

以上のように，全体として，英語合宿の導入としてのウォークラリーは成功であったが，いくつかの反省点もある：

- 1) 男子と女子の混合のグループでは，男子は男子のみ，女子は女子のみで会話が進んでしまう
- 2) 学年が混合のグループでは，同一学年のみで会話をしてしまう傾向にある
- 3) 話されている英語は単語が 2～3 語程度の文章である（例：Teacher, right, OK?: 先生，ここは右に進みますか？）

解決策として，単に歩くだけではなく，各チェックポイントにおいて，英語を使用して，全員で力を合わせなければクリアできないゲーム等を与えるなどして，学生同士の交流を深め，かつ英語を使用する機会を増やすことが必要であろう．



図 1. ウォークラリー

#### 3.2 研修 1：ゲームを通じた英語指導

研修 1 では，参加者を 3 班に分け，1 人の外国人講師が 1 つの班を指導する体制をとった，各講師は，それぞれ英語を使ったゲームを用意し，ゲームを通じて英語でのコミュニケーションを体験することを当研修の目的とした．方法としては，90 分の研修時間中 20 分交代で班をローテーションさせ，すべての班が，それぞれの講師の指導を一度は受けることができるように企画されたが，実際は各講師間でのゲームの時間調整が難しく，90 分中にローテーションは 1 度しか行われなかったため，各班は二人の講師の指導を受けるに留まった．

それぞれの講師が行ったゲームは以下の通りである：

- 1) ファンバーグ講師：「英語で楽しむ『UNO』ゲーム」

2) キム講師：「スネイクゲーム（すごろく）」

3) ブラウン講師：「ポプリーゲーム」

1) は人気のカードゲーム『UNO』を使ったゲームである『UNO』は数字を使ったゲームであり、番号が書かれた札をどんどん捨てて、手持ちのカードをなくせばゲームに勝つというルールである。学生がある番号のカードを捨てるとき、あらかじめその番号に、「自分の好きなことを英語で言う」や「最近見た映画について英語で話す」等の指示が設定されており、その指示に従って、英語を話しながらその番号のカードを捨てていくのである。この方法により、必ず学生は英語の使用が義務付けられ、短いセンテンスであるが、自分で考えて話すことようになる。

2) の「スネイクゲーム」は蛇の形をしたすごろくゲームであり、英語で指示がすごろくのコマの上で止まると、その指示に従わなければならないというものである。その指示も UNO ゲームと同様に、自己紹介等であったが、中には腕立て伏せ 20 回というものもあった。合宿生はゲームそのものよりも、そのゲームを通して外国人講師との会話を徐々に楽しんでいる様子であった。

3) の「ポプリーゲーム」は言葉遊びのゲームで、これは学生が円形陣を取り、その円形陣の中で、一人がオニになり、「ポプリー、ポ」と言って誰かを指名すると、指名された側は「ポ」と言



図 2. 英語で UNO ゲーム

い返さなければならないゲームである。他にもオニが「エレファント」と叫んで指名すれば、指名された者と、その両隣は体を使って象の形を作らなければならないというルールもある。先に紹介した 2 つのゲームと異なり、このゲーム自体は英語使用とはほとんど関係のないものではあったが、

あまり知らないもの同士が、このゲームを通して仲良くなり、以後の活動を円滑に進めることができるようになったことは評価すべき点である。

### 3.3 研修 2：映画の台詞を使った役割練習

研修 2 では映画『シュレック』(原題 Shrek; Vicky Jenson, Andrew Adamson 監督; Dream Works Skg. (2001)) の一部分を見せ、そこで使用される英語表現について学習することを目的とした。ここでは特に次のような表現が選ばれ重点的に学習された：

- What happened to you?
- as long as I can remember...
- Every night I...
- This is not how a princess is meant to look
- You have a lot in common
- He's your true love
- You should/ you shouldn't

これらの表現を用いて、ある学生は以下のような表現を考えた：

- What happened to you? --- I worked for my exam.
- As long as I can remember, I have liked steak.
- Every night I listen to music before I go to bed.
- Ai and Komiya have a lot in common.
- You should washing the wear every day.

いくつかの表現は学生にとって難しい表現であるように思われたが、学生は映画を通じて、生きた英語表現を学ぶことで、英語を学習する喜びを感じ取ったようである。

映画を利用した学習に関しては、例えば國吉 (2005) は、「抜き出したセリフをまねることで、ことばにたいする親近感を増し、のちに必要が生じたときに、自然に口をついてある英語表現が飛び出すというような経過をたどるでしょう (中略)」。このようにして習得した音声言語は、発声もよみなく反射的になされ、相手の英語話者とのスムーズな会話を可能にし、緊密な人間関係の成立を

可能にします．このような言語の交換において成立した人間関係は信頼でき、困ったときに助け合いをするような間柄の形成を可能にし、とかくコミュニケーションが苦手と言われる日本人にとって大きな力となります．」(國吉 2005 : 23) と述べているが、ここでもそのような効果を得られたのではないだろうか．



図 3．映画のセリフを学ぶ学生

### 3.4 研修 3 : スキットの製作

ここでは映画の台詞を基に、自分たちのロールプレイを作った、基となった台詞は次のようなものである：

- A: You should marry Shrek.  
B: No, I should marry Lord Farquard.

これは『シュレック』の登場人物のやり取りであるが、このように一方が「お前は～すべきだ」と主張し、相手が「いや、私は～すべきだ」と言い返す表現に加えて、それぞれがその根拠を because～で示すことにより、会話の内容を膨らませていくことが研修の狙いである．

本研修では、班ごとに 3～4 人のグループに分かれ、それぞれが自分たちのロールプレイを英語で討議しながら考えた．ここで外国人講師はそれぞれのグループに様々な助言を与えることで、より完成度の高いロールプレイを作ることを目指した．英語のみによる討議という点に関しては、中には教師の目が届かないところでは日本語を使う学生も散見されたが、基本的には学生は片言ながら、何とかして英語でロールプレイを作ろうと努力していた．また教師として感心させられたことは、普通の授業で同じようなロールプレイを作成させ

た場合、まったく作ろうとせず、ただ世間話をして時間を過ごすグループがいたりするが、この合宿参加者に限っては、そのようなグループが発生することはなかった．合宿に参加しようとするほどの学生であるから、モチベーションがあらかじめ高いことがその最たる理由かもしれないが、世間から隔離されて、英語使用しか許されない状況が、このような活動に積極的に参加するようにさせたとも考えられる．



図 4．スキットの練習

### 3.5 研修 4 : スキットの披露

翌日の研修では、自分たちが創ったスキットを合宿参加者全員の前で披露する場が設けられた．発表はコンペティション形式で行われたが、優勝したグループのスキットのの一部を以下に紹介する：

- 学生 1 : Today three famous people came here. Mickey, Ichiro, and Agassi. Mickey is a character of Disney. Ichiro is a good baseball player. Agassi is a good tennis player. Let's report through from Mickey first. Hi!  
学生 2 : Hi, I'm Mickey.  
学生 1 : You are very busy everyday at Disney resort. Do you have free time?  
学生 2 : No, but I'm happy because I can meet everyone.  
学生 1 : Where's your home?  
学生 2 : It is in town in Disneyland. There are movie stores in my house. Please come to meet me, meet me here again. Take a picture with me.

学生1: What is secret of your eternal idol.

学生2: Always keeping smile on my face.

So when you keep smile on your face every time, you make everyone make so happy...

このスキットには、文法的にも、意味的にも誤りの表現が含まれているが、合宿生は英語の間違いを気にすることなく、のびのびと役割を演じていた。これは参加したどのグループに当てはまることであった。

その上、このスキットの披露に関しては、ほとんどの参加者が用意した英文を暗記していた。声が聞き取りづらい学生もいたが、おおむね大きな声で発表ができ、聴衆にもわかりやすく演じていた。また、合宿を始めた時とうって変わって、全員が生き生きとした表情で取り組んでいた。このロールプレイを通して、人前で英語を話すことに対する抵抗心をなくし、英語を使うことの喜びを指導できたのではないかと考えている。

一方、反省点としては、十分な発音指導を行っていなかったため、外国人講師の発音とは程遠いものがあつた。ほぼマンツーマンで外国人講師から指導を受ける機会であつたので、発音に関して、もう少し個人的な指導をお願いすべきだった。



図5. 表彰風景

また今回は少人数のグループで行ったために、比較的短い時間のロールプレイになってしまったが、ひとつのグループの人数をもう少し増やし、より大掛かりなロールプレイにしたほうが、創造性に富むものになったのではないだろうか。これらの点を今後の課題としたい。

### 3. 評価

研修終了後、ただちにアンケート調査をおこなった(補遺参照)。研修全体について「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答した者が23名(85.2%)もいたことからみても、全体的な満足度は高かったと言える(Q.10)。

特に意外だった点は、研修期間が「やや短い」「短かすぎる」と答えた学生が9名(33%)もいた一方、「長い」という回答が皆無だったことである。ほとんどの参加者が英語を使う活動に没頭できたことを裏付ける結果の一つと言えよう。

個々の活動についてみても、100%の満足度は得られなかったものの、7割程度の参加者が「良かった」「楽しかった」という回答を返しており、ほぼ成功だったと言えよう。

改善すべき点としては、実施時期と施設(特に食事)の問題である。実施時期については、秋を希望する声が多かった。ただ、秋は他の学校行事が目白押しなだけに、やや難しい意味がある。夏期休業を利用したキャンプなども検討する価値があるかも知れない。

施設については、やや不満があつたようだ。主な不満は食事だと思われる。研修所自体が小中学生をその中心的研修対象としていることもあってか、やや、もの足りないという感想を持つ学生が多かった。

### 4. まとめ

日常的に英語を使う環境にない高専生にとって、今回の合宿は「英語で生活する」初めての経験となった。問題点もあつた。基礎的な単語の知識が不足しているため、言いたいことを満足に伝えられず、欲求不満に陥る者もいた。休憩時には、どうしてもグループで固まって行動してしまうという、海外でよく観察される行動をとる参加者もいた。ただ、全体的には「英語を使おう」とする姿勢・態度には熱意を感じた。2日間、事故や健康管理などが心配だったが、「楽しかった」「また来たい」というアンケートの回答を読むと、疲れも癒えた。今回の研修での成果や反省点を整理し、是非、学校行事の一つとして定着できる活動に発展させてゆきたい。

## 参考文献

- 國吉初美(2005),「映画を使った授業のやり方」  
『英語教育』第 53 巻 12 号, pp21-23.  
関東信越地区高等専門学校(編)(2002),『国立  
立高等専門学校協会平成 13・14 年度教育方法  
改善共同プロジェクト --- コミュニケーシ  
ョン能力育成を主眼とした高専英語教育のあ  
りかた --- 中間報告書』, [国専協(2003)]  
関東信越地区高等専門学校(編)(2003),『国立  
高等専門学校協会平成 13・14 年度教育方法改  
善共同プロジェクト --- コミュニケーショ  
ン能力育成を主眼とした高専英語教育のあ  
りかた --- 最終報告書』, [国専協(2003)]

## 注

- 1) 本活動については,平成 16 年度教育方法改善  
経費・学生活動活性化プロジェクト(GPG-1)の助  
成を受けておこなった。

## 補遺

平成 16 年度第 1 回英語合宿アンケート調査結果  
(2005 年 2 月 6 日)(数字は回答数)

### Q1. 事前ガイダンスは適切でしたか

- |             |   |
|-------------|---|
| 1) 適切だった    | 9 |
| 2) ほぼ適切だった  | 6 |
| 3) 普通       | 9 |
| 4) やや不適切だった | 1 |
| 5) 適切ではなかった |   |

### Q2. 研修の長さ(1泊2日)は適切でしたか

- |           |    |
|-----------|----|
| 1) 長過ぎる   | 0  |
| 2) やや長過ぎる | 0  |
| 3) 適切     | 15 |
| 4) やや短かった | 6  |
| 5) 短すぎる   | 3  |

### Q3. 研修施設には満足していますか

- |              |   |
|--------------|---|
| 1) とても良かった   | 8 |
| 2) まあまあ良かった  | 7 |
| 3) どちらとも言えない | 4 |
| 4) あまり良くなかった | 4 |
| 5) 全然良くなかった  | 2 |

### Q4. 全体的に研修の難易度は適切でしたか

- |            |    |
|------------|----|
| 1) 難しすぎた   | 0  |
| 2) やや難しかった | 7  |
| 3) 適切      | 17 |
| 4) やや簡単だった | 1  |
| 5) 簡単すぎた   |    |

### Q5. オリエンテーリングは楽しかったですか

- |               |    |
|---------------|----|
| 1) とても楽しかった   | 7  |
| 2) まあまあ楽しかった  | 11 |
| 3) どちらとも言えない  | 3  |
| 4) あまり楽しくなかった | 2  |
| 5) 全然楽しくなかった  | 2  |

### Q6. 映画を使ったレッスンは楽しかったですか

- |               |    |
|---------------|----|
| 1) とても楽しかった   | 10 |
| 2) まあまあ楽しかった  | 8  |
| 3) どちらとも言えない  | 7  |
| 4) あまり楽しくなかった | 0  |
| 5) 全然楽しくなかった  | 0  |

### Q7. 授業班の人数(8~9人)は適切でしたか。

- |          |    |
|----------|----|
| 1) 多すぎる  | 0  |
| 2) やや多い  | 0  |
| 3) 適切    | 25 |
| 4) やや少ない | 0  |
| 5) 少なすぎる | 0  |

### Q8. 天体観測は楽しかったですか

- |               |    |
|---------------|----|
| 1) とても楽しかった   | 12 |
| 2) まあまあ楽しかった  | 10 |
| 3) どちらとも言えない  | 1  |
| 4) あまり楽しくなかった | 0  |
| 5) 全然楽しくなかった  | 2  |

### Q9. 日本語禁止というルールはどうでしたか。

- |                  |    |
|------------------|----|
| 1) とても大変で、大変苦労した | 5  |
| 2) すこし大変だった      | 10 |
| 3) どちらとも言えない     | 4  |
| 4) それほど大変ではなかった  | 3  |
| 5) 全く苦労しなかった     | 3  |

### Q10. 研修全体は、全体として、どうでしたか。

- |              |    |
|--------------|----|
| 1) とても良かった   | 17 |
| 2) まあまあ良かった  | 5  |
| 3) どちらとも言えない | 1  |
| 4) あまり良くなかった | 0  |
| 5) 全然良くなかった  | 0  |

### Q11. 適切な研修の時期はいつ頃だと思いますか。

- |     |    |
|-----|----|
| ・ 秋 | 10 |
|-----|----|

- |     |   |
|-----|---|
| ・ 冬 | 7 |
| ・ 夏 | 6 |

Q12 . 感想、要望

- ・ 良い思い出になった
- ・ 研修前に、これは英語でどういのかななどを教えてほしい
- ・ 最後のプレゼンテーションで追いつめられた
- ・ ごはんがだめだよ。
- ・ 外国人講師の発音などがとても参考になった。
- ・ 初めはものすごく難しいと思っていたけど、いざ英語を話すとそれほど苦ではなく楽しかったです。
- ・ とても楽しかった。また来たい。
- ・ 日本語禁止は大変でした。少人数の授業をもっとしたかった。
- ・ 思っていたより楽しかった。
- ・ 先輩と仲良くなれてよかった。
- ・ 英語もすこしは聞き取れて嬉しかった。
- ・ いっしょに料理を英語で勉強してみたい。
- ・ 全体的に人数も多くなくて、他の人と話したりしやすかった
- ・ すごい楽しかったです。またやってください。
- ・ 外国人講師にお世話になった。